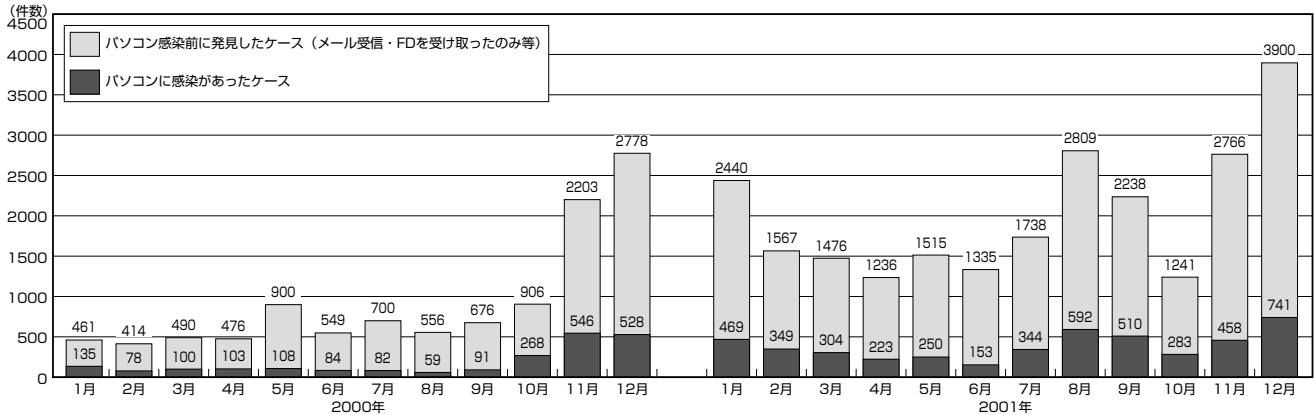


第3章 犯罪/セキュリティー

コンピュータウイルス

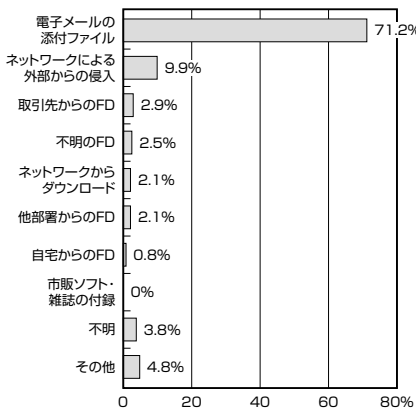
ウイルス遭遇件数、遭遇経験とも大幅に増加

資料3-3-7 コンピュータウイルス届出件数の月別推移



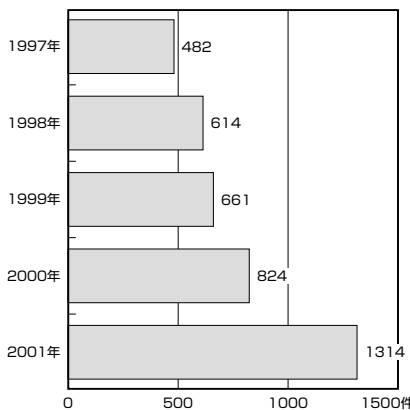
出所 情報処理振興事業協会セキュリティセンター (IPA/ISEC)

資料3-3-8 感染経路



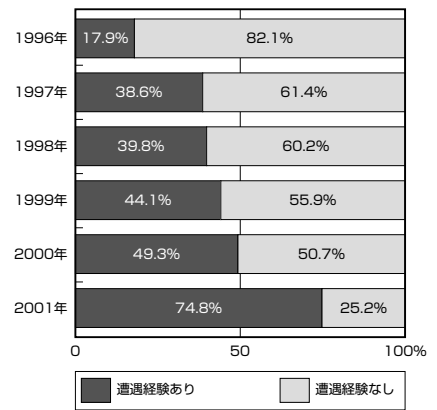
出所 情報処理振興事業協会セキュリティセンター (IPA/ISEC)

資料3-3-9 コンピュータウイルス遭遇件数の推移



出所 情報処理振興事業協会セキュリティセンター (IPA/ISEC)

資料3-3-10 コンピュータウイルス遭遇経験の有無の推移



出所 情報処理振興事業協会セキュリティセンター (IPA/ISEC)

解説

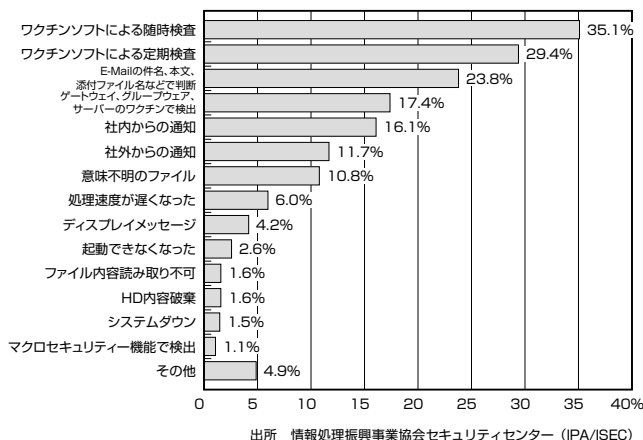
情報処理振興事業協会セキュリティセンター (IPA/ISEC) に届けられたウイルス件数の推移を見ると、年末にピークを示す傾向は変わらないものの、件数は増加の一途を辿っている (資料3-3-7)。2001年末から2002年初は「Christmas.exe」という添付ファイルで感染していくMaldalという季節ものや、2001年夏から猛威をふるっているBadtransの亜種、トロイの木馬型のワームであるMypartyなどが蔓延した。Klezという、毎月6日にC:ドライブのファイルを削除し、駆除する際にもレジストリーを修正する必要があ

るなど、悪質なウイルスも出現している。最近のウイルスの特徴的傾向は、メール機能を悪用したものが大多数になっていること (資料3-3-8)。とくにOutlookやOutlook Expressをターゲットにしているものが多く、またインターネットエクスプローラ (IE) のセキュリティーホールを悪用するものもかなりある。NimdaやAlizなどは、Outlookではメールを開いただけで、Outlook Expressではプレビューしただけでもウイルスに感染するので、添付ファイルを開かなければ大丈夫という安心は禁物である。とくにNimdaは、

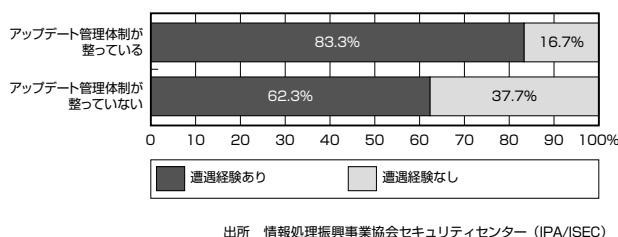
複数のウイルス・不正アクセス手段を組み合わせていて、クライアントとウェブサーバーの両方に影響を与えるだけでなく、複数のコンピュータが関与するため感染の広がり方も複雑になっている。ウイルスの遭遇件数、遭遇経験の割合とも大幅に増加しており (資料3-3-9,10)、ウイルスに遭遇するのは、もはや日常の出来事になっているといえる。ADSLやCATVを始めとするブロードバンドの普及により、この傾向はますます加速されることは間違いない。

(安田直義 株式会社ディアイティ)

資料3-3-11 ウイルス発見の経緯



資料3-3-12 ワクチンソフトのアップデートの管理体制とウイルス感染

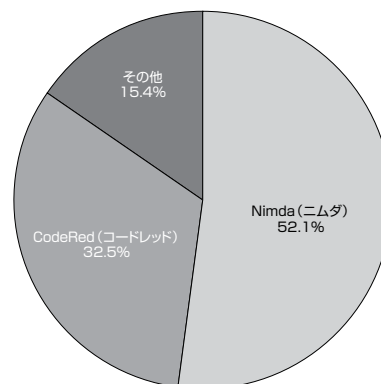


資料3-3-13 日本でのインシデント被害額調査 (年間合計被害額)

企業 No.	コスト/日	インシデントごとの被害額			年間合計 (単位:千円)
		①	②	③	
1	40	60,000			60,000
2	40	200	20,000	60	20,260
3	40	1,860	15,000		16,860
4	150	15,750			15,750
5	30	1,500	4,500		6,000
6	45	3,915	549	450	4,914
7	150	1,500	3,000	20	4,520
8	40	2,004	40	2,400	4,444
9	40	416	800	800	2,016
10	40	220	1,620	80	1,920

出所 NPO日本ネットワークセキュリティ協会

資料3-3-14 感染ウイルスの種類 (金額比率)



出所 NPO日本ネットワークセキュリティ協会

解説

ウイルス発見の経緯は、ワクチンソフトによるチェックがトップであり、約65%がクライアントPCにインストールされたウイルス検出ソフトによって検出されている。PCを購入するとワクチンソフトがブレイクインストールされていることも影響しているのだろう(資料3-3-11)。また、組織でのワクチンソフトの強制的適用とアップデート体制を整備するところも増えている(資料3-3-12)。体制が整っているとしている組織では、83.3%でコンピュータウイルスの遭遇経験を持つ。やはり、怪我をしないと痛みがわからないようである。

ウイルスによる被害は、対応に技術者が走ったり、顧客にお詫びの連絡をしたという、直接的な被害だけでもかなりの額にのぼっている。NPO日本ネットワークセキュリティ協会とIPAで調査した報告によると、1つのウイルス感染対策で6000万円の費用がかかったとする組織もあった(資料3-3-13)。これはヒアリングを行った担当責任者のわかる範囲内ということなので、実際にはもっと多額の被害が出ていたかもしれない。また、感染ウイルスはNimdaとCodeRedで85%に達し、この2つがウイルスの猛威を印

象付けた結果となっている(資料3-3-14)。現時点では、現場技術者が対応することで問題を吸収していて、表面的には直接の出費は見えていないので、被害額という意味ではあまり真剣に考えられていない面もあるだろう。しかしそろそろ危険回避について、技術的な面をきちんと押さえた上で、組織のポリシーや、社内システムの運用規定、管理規定や、法律的な対策も含めて考えるべき時期になってきていると思われる。

(安田直義 株式会社ディアティ)



[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp